



どう接すればいいの？ 悲嘆にくれる両親に
～グリーフケア～

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡県母性衛生学会 公開日: 2023-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 尚子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00004319

どう接すればいいの？ 悲嘆にくれる両親に ～グリーフケア～

静岡県立大学 聖路加看護大学ペリネイタル・ロス研究会

太田 尚子

流産、死産、新生児死亡などのお産を取り巻く喪失をペリネイタル・ロスと言う。今回は、筆者のこれまでの研究と実践活動から、ペリネイタル・ロスのグリーフケアについて学んだことを紹介する。

ペリネイタル・ロスのグリーフは、他の死別のグリーフと比べて、異なった特徴がある。第1は、誕生と死が同時に訪れることから、グリーフワークをしながら、同時に、親になる過程をたどっていくことである。そのため医療者は、子どもと別れることを支援する前に、子どもに出会うことを支援していく。医療者は、両親のニーズに沿って、亡くなった子どもに会うこと、抱くこと、着物を着せること、沐浴などの親行動を、ニーズに沿って支援することで、両親が親になることを支えることができる。

第2の特徴は、ご両親の子どもとの思い出は大変少なく、亡くなった後に思い出をつくる時間が必要なことである。火葬までのわずかな時間が、思い出づくりのための時間として大変貴重である。両親の希望に沿って、亡くなった子どもと一緒に写真を撮ったり、手形や足型をとったりする。子どもと、一緒に過ごした時間も大切な思い出になるため、火葬は急ぐ必要はない。火葬の時期は、葬儀屋や火葬場の予定によって決めるのではなく、両親が子どもと一緒にゆっくり時間を過ごした後、両親が、お別れができそうだった時にすることが望ましい。また、時間が少ないために、医療者の支援がないと遺品を残す機会を逸したり、時間の経過と共に遺品への想いが強くなったりする場合が多いことも留意すべき点である。

第3の特徴は、ペリネイタル・ロスのグリーフが、「非公認のグリーフ」であることである。社会のなかで隠され、語られることが少ないために、悲しみが過小評価されがちであり、そのため両親は、子どもを亡くした悲しみだけでなく、子どもへの愛情を表現できない辛さや社会のなかでの孤独という大きな苦悩を抱えている。そのような辛い状況に於かれたご両親にとって、想いを言語化する機会を与える、セルフヘルプグループは、グリーフケアのひとつの場として有効である。

子どもを亡くした両親へのケアを考えると、最も大切なのは、体験者の生の声に耳を傾けることである。医療者が良かれと思って行なってきたケアが、実は間違っていたということが、この領域のケアの歴史には多く存在した。これまで行なってきたケアや固定観念にとらわれることなく、体験者の声に真摯に向き合うことが医療者に求められている。